

新刊紹介

小論理學（ヘーゲル全集第一卷）

眞下信一譯
脇坂光次譯

こゝに譯出されたる「小論理學」は、ヘーゲルの『哲學體系』第一部、「論理學」の全譯であり、尙、一八一八年、ベルリンに於ける講義に際してなされた聽講者に對する挨拶・第一版、第二版、第三版に對するヘーゲルの序文・序論及本文の補説が添へられてゐる。今、「論理學」と他の諸體系との關係、「論理學」の内容そのもの等に立入つて語らるべきでないとするも、論理學はヘーゲルに於ては、同時に形而上學であり、本體論と一であり、形式的、主觀的、悟性論理學を越えて包む客觀的、理性的論理學として、その成果と本質は辯證法であり、自然界、精神界の根本圖式として、存在の論理の性格に於て把握せられねばならず、まことの意味に於ける實踐の原理的指針であり、而して、現實の現段階の歴史的必然性にさへ睨目するならこの書の意義と力とは自から釋然たるものがあらう。

ヘーゲルの「論理學」は、之を他國語に移すことは困難であるとせられる。殊に第二編、本質論の翻譯は殆どヘーゲルの意味を失するであらうことは既に謂はれてゐる。併し、之は翻譯の免れ難き制限として許容せられねばならぬであらう。

邦譯は眞下、脇坂兩氏の共同勞作として、論理學本論及補説は脇坂氏が譯し、其他を眞下氏が譯したものである。同一著作の分擔譯に伴ふ多くの弊害にも拘らず、ヘーゲル自身の思想に深く沈潜し、原典に定着することに依て受容的、回顧的態度がとられることに依り、ヘーゲルの精神は遺憾なく移し替へられてゐる。併し、又、兩氏自から譯出上の差異なきではない。眞下氏は直譯を卻けて、自由な態度をとつてゐられる。例之、原典に直接、そこに見出されない語、句、章が多く補はれて、説明的であり、ために、随分思ひ切つて譯出された箇所も鮮しとしない。かゝる譯は懇切なる譯と云はるべきであり、原典に言はれてゐる何を特に知らんとするものにとつては至便である。併し、それが却つて讀みづらくし、思ひ誤らしめる所がないでもない。一言一句も忽せにしないヘーゲルの著作に於ける如き場合には、一方、意味は、又、逐次的に辿らるべきでもあらう。眞下氏の懇切、流暢なる譯に對し、脇坂氏は忠實に、逐次的に意味を移してゐられるやうである。實直なる氏の譯出が、原典が、いかに言はれてゐるかを傳へ得て、剛健なるヘーゲルの思想を移すに相應はしいかにみえる。

譯語は統一的に使用せられてはゐるが、併し夫々の場合、全體との關聯の許に、その時、そこで、最も適當と思はれるものが選ばれてゐる。例之、Gesetzseinが双關性、顯示在、媒介的的規定立存、依屬存在、働くもの、關係に入り込んだもの、等々と譯され、Daseinが定在、質的規定、直接規定、等々と譯さるゝが如きである。Einheit, zu Grunde gehen, 及 Scheinen in sich selbst

彙報

哲學會公開講演會

十一月二十六日(土)法經第九教室に於て、午後一時半より

美の轉向とその課題

自由の問題

開會後本部樓上にて晚餐會を催す。遠來の先輩多數來會

中井 正一君
天野 貞祐君

哲學研究會

十二月十五日(木)學生集會所に於て
物理學の世界像

下村寅太郎君

倫理學讀書會

十二月九日午後三時より和辻教授研究室に於て
Fische: Zweite Einleitung in die Wissenschaftslehre

蓮實 義倫君

倫理學懇親會

十二月十六日午後六時より「島初」にて忘年會を催す

美學會

十二月二十日(水)樂友會館にて
山雪

土居 次義君

美學讀書會

十二月十六日(金)樂友會館にて
文學の一二の問題—リードを中心として

山田康一郎君

心理學讀書會

十二月八日(木)教室に於て
血液型について

岩井勝二郎君

十二月十五日(木)
妊娠尿の注射による兔の卵巢の肉眼的變化

井口 榮君

に於ける格の相異に依りて生ずる兩義的微妙關係等も克明にせられ Wechselwirkung を交錯的活動と譯し, differente Object を離合的客觀と譯さるゝが如き、譯者苦心の一例を示すものにすぎぬ。縱令、思ひ間違へられ易い譯出がなくなるとは云へ、直接、誤譯と指摘さるべき如きものは殆どなく、漏譯、誤植も一、二を數へるにすぎず、前に現れたる二、三の譯書を凌ぐこと、單に後に現れたるもの、優越性を示すに止まるものでない。

原典のコンマ、プンクトが、勿論、邦譯の句讀點に相應してゐるわけでなく、()、〔 〕、[]、(一)、(二)、一、…符及邦譯黑色傍點は原典以外に、適宜譯者に依て多く入れられてゐる。！符の殆ど凡ては譯者のものでさへある。この些少な事實も、簡單に見逃さるべきでなく、譯者が譯出に際し自己否定的態度をとつたのでなく、自ら血を以て原典を辿つたものであることの證左となりうるであらう。

固、ヘーゲルの論理學は、思惟の單なる分析に依り思辨的に手繰り出だされたる如きものでなく、その基礎は歴史的現實の生ける實質である。譯者の序言の語句如く「今、滔々として押寄せてゐる狂瀾怒濤の渦」に耳を蔽ふことなく、すゝんでこの渦中に身を措くもの、み、能く、ヘーゲル論理學のもつ「天才的なるもの」を過つことなく把みうるであらう。勝れたるこの譯書が繰り返へし、捲き返へし、今、この國に於て讀まれんことを願ふ。

(紹介者、箕實、岩波書店發行、定價參圓八拾錢)